

ないが、この領域での導入段階では、柳生すみまろの 1985 年の著作が、全体のひとまずの見とおしを作るのに、2016 年現在でも有用である⁵³。ただし、柳生は記述の上で出典を示していないが、内容を勘案すると、その巻末にも示されているとおり、ブレンダーガストを多く参照している。

近年では、作曲家コルンゴルトの再評価にともなって、ハリウッドの映画音楽のスタイル形成が、コルンゴルトやスタイナーなどユダヤ人作曲家の亡命によってもたらされたとするトピックが取り上げられることも多くなった。亡命作曲家とハリウッド映画については、前述のボードウェルも 1985 年にその研究内で論じている。日本国内においてこの点が着目されるにいたる契機としては、文学者で映画批評家の蓮實重彦に見いだすことができる。多摩美術大学などでの、かつての講義録をまとめた著作『映画はいかにして死ぬか：横断的映画史の試み』(1985 年) に、かかる問題提起の国内での端緒が読める⁵⁴。ここで、蓮實はまた、自国での文化活動がかなわなかった亡命文化人たちの、その宿命としての〈移動〉‘moving’ が、20 世紀の文化形成に大きな作用を及ぼしたことの意義について、ここで論じている。

2-3. 議論すべき 3 つの論点

先行研究とここまでのわれわれの議論をふまえて、本論が以降に議論すべき具体的な論点には以下の 3 点を挙げることができる。

まず、第 1 の論点は、今日のアメリカ史学の議論において、「現代アメリカ」の形成の過程の中で〈革新主義〉がどのように位置づけられているかである。これは、あとの章において、コープランドの音楽活動をアメリカ史の中に位置づけて議論するために必要な考察である。それはまた、既述のとおり、先行例としてのクライスト [ECAC] の不足点を補うための検討でもある。第 2 の論点は、〈革新主義〉の動向が、およそ 1930 年代のコープランドにいかなる音楽理念上の変容を与えたか、また、その帰趨にどのような音楽があったかを考察することである。最後、第 3 の論点は、〈革新主義〉の動向の先に辿り着いた彼の音楽実践を取り上げ、その〈テキスト〉分析を行なうことで、その内実を探究することである。

本章の最後に、以降の考察において、常に本論が留意すべき指針をいみじくも示した、ニューヨー

ク大学の映画学教授ロバート・スタムによる言葉を引用しておきたい。

先行するあらゆる芸術や言説を継承し、複数の感覚を組み合わせるマルチトラックのメディアとしての映画研究は、実質上多分野にわたるアプローチを余儀なくさせる⁵⁵